| 南アルプス | 北沢峠から仙丈・甲斐駒・白須へ | No.082 |
|---|---|---|

冬山での生活・技術は段々自分の物になりつつある。いよいよ「3000mの冬山」に挑むことになった。
メンバーは、恩田（リーダー）、吉野、小林の三人。

**昭和42年3月17日　＜出発＞**

22時35分発　急行上高地、空いている。楽に座れたが暖房が効きすぎていて眠れない。天気は怪しげ。

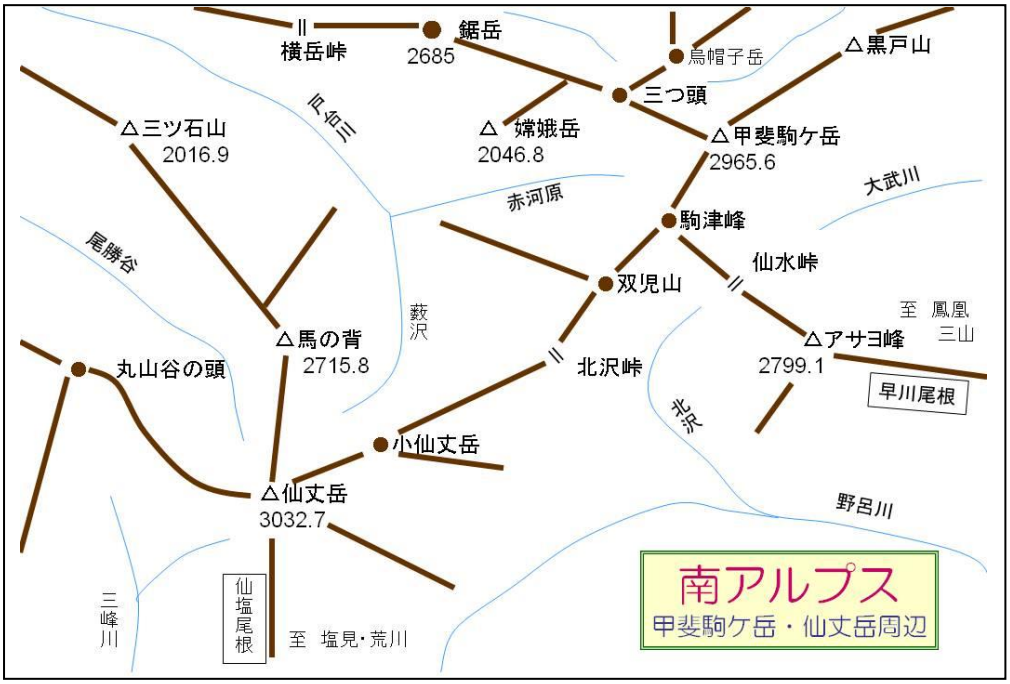
**昭和42年3月18日　＜辰野→伊那北→戸台→赤河原→北沢峠→北沢＞**

辰野3時48分着、飯田線の一番電車を待つ間にパンを食べて空腹を治める。4時45分発。
伊那北駅は雨ザアザア降り、あらためて朝食をとりながらバス待ち。
バスは6時28分発、戸台着7時50分。ここは海抜1000m、雨は「結構な降りでげすな」と言いたくなるようなザンザカ降り。しばらく雨足を見たが、一向に止む気配はない。バスを下りた登山客は皆出発してしまいビリになってしまった。諦めて8時20分ポンチョをかぶって出発。
雨の河原歩きは切ない。丹渓山荘（1451m）着11時15分。戸台を出発した時はビリだったが、丹渓山荘にはトップで到着。休憩代50円を払ってお茶を飲んで昼食。ストーブで体を乾かして、12時45分出発。
八丁坂の凍結には泣かされる。氷に足をとられて歩きにくいこと甚だしい。吉野の足がつり始めてかなり乱調な歩き方になってきた。危険回避のため彼にだけアイゼンを着けさせる。
雨は霰に変わり、やがて峠が近くなると雪に変わった。気温も急激に低下し、手の甲は紫色。
北沢峠（2030m）14時45分、北沢15時。吹雪で幕営できず北沢小屋に逃げ込む。素泊まり300円はショックだがこの吹雪で外に出るわけにはいかない。
16時の気象通報を聞き天気図を作成。三陸沖に990mb、伊豆半島にも990mbと二つの低気圧があり、これらを結ぶ前線が太平洋岸を南大東島まで延びている。北海道には1002mbの別の低気圧があり、ここからの前線は日本海岸を能登半島まで。
という、見るからに惨めな気圧配置。日本列島は完全に気圧の谷間に落ち込んでいる。しかし風向が北西になっているから、いくらかでも回復方向なのだろうか。
16時15分から夕食、食事当番は恩田でメニューは雑煮。せっかく運んできたホウレンソウを入れ忘れて他の二人の怒りを買う場面もあったが、まずは平穏無事に初日が終わった。吉野の足のつりを直すべく秘術のマッサージを披露。
人の世話をしているものの自分も八丁坂の急登と気温の急激な変化により右膝の痛みが再発し、体重がかけられない状態。平穏無事に日程をこなしはしたが、苦境でもある。右膝に手ぬぐいを厚く巻いて冷えないようにして夜を過ごすことにした。19時半就寝。

**昭和42年3月19日　＜北沢→仙丈岳→北沢＞**

起床4時半、すぐに左膝を曲げてみる、痛い。こんな悲しいことがあるだろうか。でも仙丈だけはやるぞ。5月に頂上を踏みそこなっているので、どうしても登りたい。気合と不安との中で朝食は餅入りラーメン。
テルモスにミルク紅茶を入れて出発、6時40分。今日はサブザックで快適な出発だ。
昨日とは打って変わって快晴。大滝の頭が近づくに連れて甲斐駒と北岳が物凄い迫力で迫ってくる。
残念なことに写真担当の吉野のカメラが凍傷にかかってしまって動かない。仕方がないので、新型EEカメラ「Medama」を使うことになった。（今回の山行は写真が一枚もないという結果となった）
大滝の頭（2519m）8時。しばらく進むと稜線は裸の雪稜となり、風の攻撃を受けるようになる。小仙丈への登りはピッケルを使って三点確保をしながらの一歩一歩の歩みに風の雄叫びが耳元を襲う。ここで吉野の足がまたつり始め、恩田の叱咤激励にもかかわらず彼のフットワークは乱れ勝ち。

私の左足もかなり痛いが、とにかく仙丈に登らなければ話にならないという気が先に立ち、右足に体重がかかる時にはしかめっ面でこらえてトップの恩田に続いた。
小仙丈ケ岳（2864m）9時20分、仙丈の頂上らしきものがやっと見えてきた。野呂川側の斜面で風をよけて一休み。こんなにいい天気なのに、足さえ痛くなければ・・・・
吉野の調子があまり良くないので、彼にここで待機してもらい恩田と二人で頂上をアタックすることにした。吉野のためにツェルトと昼食を置いて9時30分出発。やせ尾根を登ったり下ったり、目の前に見えているのにかなり歩かされる。10時、頂上を目前にして空腹にたまらず昼食。テルモスのミルク紅茶が旨い。




昼食の後は俄然好調。大きなカールのど真ん中を直登して、10時30分に3032.7mの仙丈ケ岳頂上に到達。遠く加賀の白山までが見える眺めを見渡しているうちに、足の痛みなど忘れてハラハラと涙がこぼれてきて止まらない。ゴーグルの中で生暖かい涙が段々に冷たくなっていくのがわかる。痛みをこらえて執念深く登ってきた甲斐があった。恩田とがっちりと握手、お互いに顔がほころんだひと時。
約10分間八方の眺めに見入った後、10時40分に出発し吉野の待つ小仙丈へ。登りのトレイルに沿ってアイゼンの八本の爪を利かせて慎重に下る。左の鼻の穴が凍ってしまい呼吸がしにくい。
小仙丈ケ岳11時10分。三人でツェルトをかぶって再び食事。
結構風にあおられて厳しい一面もあったせいか、所要時間の割りには疲労感がある。恩田が食べたばかりの昼食を吐き出してしまい一瞬心配したが、たいしたことはなさそうな様子で一安心。
12時　40分出発、下山に入る。下りは膝に負担がかかるせいかかなり痛みを感じる。でもここは冬山のアイスバーンの上、痛くてもおかしな歩き方はできない。こらえて、こらえて、辛抱、辛抱。
アイスバーンがなくなった所からは尻セードで時間を稼ぎ、北沢まで一時間足らずで下ってしまった。
今日は天気が良いので幕営することにし、場所探し。明日登る甲斐駒への便利さを考え、仙水峠寄りの平坦地を見つけて幕営。雪を二尺ほど掘り下げてツェルトを張る。
このツェルトは冬山の雪の中しかも海抜　2000m以上の所で使用するのは昨年11月の八ヶ岳以来二度目。明日の天気はもうわかっているので、今日は天気図はとらない。
17時夕食、19時30分就寝。右ひざは大分痛いので、今夜も手ぬぐいを巻いて寝る。

**昭和42年3月20日　＜北沢→仙水峠→甲斐駒ケ岳→五合目＞**

起床3時50分。シュラフが濡れてしまった。それでも夜が比較的暖かで、しかも手ぬぐいを巻いて寝たので

足は大分良くなった。これなら駒ケ岳に登れそうだ。吉野の方はあまり良くない。仙丈に比べるとかなり男性的でアイゼンワークの確実性が要求される甲斐駒で足がつるようだと危険なので三人で充分協議の末、下山してもらうことにした。
ツェルト撤収、出発は6時50分。吉野は右の北沢峠へ恩田と私は左の仙水峠へ。メンバーが一人欠けると寂しいものだ。殆んどの場合、私はパーティのラストを歩くので、人数が多いのと少ないのとの気分的な違いがはっきりわかる。
仙水峠（2264m）7時50分、で10分程休んだ後、雪に埋もれたハイマツの中を駒津峰へ胸突きの登り。すぐ後ろには早川尾根に連なる栗沢山がテカテカ光り輝いて見える。
何度か一息入れながら二時間余で駒津峰（2752m）10時20分。風が強くて休める場所がない。ツェルトをかぶって軽い食事と中休止。10時35分出発。
駒ケ岳から下ってくる人の話では、六方石で遭難があっようだ。駒津峰から六方石を通り抜けるまでは岩場、やせ尾根、強風とかなり条件が悪い。ピッケルとアイゼンを旨く使ってしのぐ。六方石での遭難事故は滑落とのことだが、さほどのアイスバーンでもないのに滑落停止ができなかったのだろうか。それよりも、こんなにアイゼンが良く利く雪でなぜ滑ったのも解せない。とにかく今ひとつの慎重さが足りなかっただけのことだったのだろうか。アイスバーンの斜面の下の岩場に横たわる動かない黄色いヤッケとオーバーズボンの姿が痛々しい。生きてはいるらしい、脳震盪と全身打撲で動けずまた動かせないらしい。蒼白の表情で伝令に走る者と茫然自失の表情で現場に佇む数人の顔が、事の重大さを伝えている。尾根に佇む数人の中の一人も一緒に滑落したが辛うじて助かったらしく、顔と手から血を流している。どうやら技術未熟なパーティのように見えた。とにかく、一番近い丹渓山荘に伝令が走って行き、一時対応はできており、他のパーティが手を出すべき状況でもなさそうなので、すぐにその場を辞した。自分自身に 「注意しろよ!!」 と言い聞かせながら駒ヶ岳への登りに入った。
甲斐駒ケ岳（2965.6m）、12時05分。素晴らしい天気で素晴らしい眺め。しかも意外にも頂上は風が穏やか。祠の影で軽食と半時の休憩。どの山も見えるものはすべて感激に値してしまうが、とりわけ南アルプスの山々は大きくて堂々としていて、迫力がある。
頂上から七丈小屋への下りは、直射日光と雪面からの反射で目が痛い。所々雪が柔らかくなりだして雪崩がおきやすい状態なので、ピッケルを刺しては確かめ、一歩一歩気を遣いながらのフットワーク。
七合目の鳥居13時50分、小休止をしようと思ったが、あまりの景色の良さに30分も休んでしまった。
14時25分に出発したが、ちょっと歩き出しては立ち止まり北岳の素晴らしい姿に足を止め、歩き出したらまた立ち止まり・・・・、休まずにはいられない景色の連続である。
針葉樹林帯に入ったところに五合目小屋がある。海抜 2134mここまで来るともう雪の間に草地が見えるところもある。小屋のガラスは雪に押し割られており、中がよく見える。
16時50分小屋の横にツェルトを設営。今日の一日を振り返ってみる。実によく歩いた。甲斐駒への登りもさることながら、雪が融けてからだったので下りの方が長く厳しかった。
鳳凰と富士山が手に取るように見える。夕暮れ時、富士は肌を赤く染めそして段々暗闇に没していった。
18時夕食、明日は下山するだけ。20時就寝。

**昭和42年3月21日 ＜五合目→白須→日野春→帰京＞**
起床5時30分、天気は高曇り、朝食後ツェルト撤収、アイゼンはもう不要と判断し、ザックにしまう。
出発は 8時。独標の北の肩のあたりに石楠花の大群落。勿論今花は咲いていない。鵜飼への土産に丸くしぼんだ石楠花の葉を摘む。これを日陰でゆっくり乾燥すると香りが出て、高級なタバコになる。最もこの技は鵜飼から教わったものであるが、土産としては最高の品に違いない。
ここからの下りはそこかしこに水墨画に出てくる函谷関のようなところがあり、梯子や仮橋が続く。しかも岩に吊ってある丸太ん棒は、雪に埋もれていたり氷の中に沈んでいたりで難渋を極めるひと時だ。

# 踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

函谷関が終わると今度は明るい樹林帯での尻セード。何やかやでようやく尾白川吊り橋に到着。
11時40分、水辺で昼食。恩田は食事の後で、尻セードで破いたズボンの修理。その間私は河原で高いびきの昼寝。
12時30分出発、バス道を歩き白須に13時35分到着。すぐに来た韮崎行のバスに飛び乗ったが、バス代を節約する目的で、牧の原で下車し（13時50分）日野春駅まで歩くことにした。
（バス代30円＋荷物代15円）
牧の原は釜無川の岸辺で海抜 502m、河岸段丘の上にある日野春駅は 609m。釜無川橋を渡って蛇行する道路を高度差 100m以上登らなければならず、重い荷物を背負って歩くのは重労働。肉体的な負担を考えると得策であったかどうかは極めて疑問。日野春駅着は14時17分。
静かな田舎の駅で整理体操と洗顔。赤くなった顔で駅前の食堂に入りラーメンand ライス（100円）。
今回は装備を軽くするために主食としてパンを活用したので、久しぶりのご飯粒になった。食事の後は雑談的な反省会。そして15時32分発の各駅停車で家路についた。（日野春～国立460円）
様々なアクシデントがあったが、無事主要二峰を登って来られた。まずまずの成果と言える。

以上

＜後日譚＞
手帳のメモと記憶を元にして、2009年に書いた文章であるが、文中にあるように「カメラ故障」のため
写真が一枚も残っていないため、細かなことがはっきりしない部分がある。
中でも甲斐駒ヶ岳から五合目小屋を経て白須に下った下山ルートが判然としない。
残された手帳のメモと地形図とを並べて振り返って見ると、おそらく黒戸山を越えて尾白川に下って竹宇駒ヶ岳神社に至ったと考えられる。

（修正・更新：2023年11月）